

風習的抜歯の疑われる南九州古墳時代人骨の追加例

An Additional Example of a Protohistoric Kofun Skeleton of Southern Kyushu Suggestive of Ritual Tooth Ablation

竹中正巳¹⁾・具志堅 亮²⁾
Masami Takenaka¹⁾, Ryo Gushiken²⁾

¹⁾鹿兒島女子短期大学 ²⁾鹿兒島県天城町教育委員会

鹿兒島県大崎町飯隈地下式横穴墓群22号墓人骨（男性・熟年）の上顎右側切歯は歯冠が破折し歯根のみが遺存していた。風習的抜歯が施され、歯冠が破折したために、歯根が折れ残った可能性が考えられる。古墳時代の南九州の地下式横穴墓分布域の中でも、宮崎平野部、都城盆地や大隅半島には古墳時代の新たな意味合いの抜歯風習が存在した可能性が考えられる。

Key words : 風習的抜歯、南九州、古墳時代、地下式横穴墓

1. はじめに

西日本から出土した古墳時代人骨103例中24例に風習的抜歯痕が検出され、古墳時代の抜歯風習の目的として中小豪族の相続儀礼に伴う服喪抜歯の可能性が提示されている（土肥・田中，1988）。土肥・田中（1988）は、先人の報告した愛媛、徳島、奈良、群馬、千葉の例を加えて、古墳時代の抜歯風習は日本列島の広範囲に及んでいたと考えている。

古墳時代の南九州の地下式横穴墓分布域でも、現在までに風習的抜歯の疑われる人骨が7例報告されている（表1）。しかし、古墳時代の南九州の地下式横穴墓分布域に確実に

抜歯風習が存在していたのか検討の余地があった。

2016年1月、鹿兒島県大崎町飯隈地下式横穴墓群22号墓から出土した古墳時代人骨に風習的抜歯が疑われた。本稿では、その人骨が意図的な抜歯例であるのか鑑別を行い、古墳時代の南九州の地下式横穴分布域における抜歯風習について考察を行ったので、その結果を報告する。

2. 資料および方法

風習的抜歯の疑われる人骨は、鹿兒島県大崎町飯隈地下式横穴墓群22号墓人骨（男性・熟年）である（図1）。本人骨の歯式を次に示す。

表1 古墳時代南九州地下式横穴墓分布域における風習的抜歯の疑われる人骨

人骨	所在地	性別・年齢	抜歯部位	文献
旭台地下式横穴墓群7号墳7号人骨	宮崎県西諸県郡高原町	女性・壮年	2	松下・野田(1983)
大萩地下式横穴墓群A-C区3号墳1号人骨	宮崎県西諸県郡野尻町	女性・壮年	2 2	松下(1984)
大萩地下式横穴墓群37号墳2号人骨	宮崎県西諸県郡野尻町	女性・若年	5	松下(1984)
下川東牧ノ原地下式横穴墓群16号墓出土人骨	宮崎県都城市	不明・壮年	4	竹中ほか(2005)
飯盛地下式横穴墓群2号墳人骨	宮崎県東諸県郡国富町	男性・壮年	2	土肥・田中(1988)
飯隈地下式横穴墓群22号墓人骨	鹿兒島県曾於郡大崎町	男性・熟年	2	本研究
新富東横間地下式横穴墓群3号墳人骨	鹿兒島県肝属郡高山町	女性・熟年	4	土肥・田中(1988)
北後田古墳群地下式横穴2号墓人骨	鹿兒島県肝属郡高山町	女性・壮年	4 4	竹中ほか(1993)

7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7	* : 歯冠破折
7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7	

図1・2から、上顎側切歯は歯根のみが遺存していることがわかる。この歯に風習的抜歯が疑われる。研究の方法は肉眼観察によって行った。

3. 観察結果および考察

抜歯の鑑別

図3・4・5から明らかなように、上顎右側切歯の歯冠が破折し、歯根のみが遺存する。上顎右の中切歯と犬歯の間の距離は7mm弱である。左上顎側切歯の近遠心径と比べて、わずかに狭くなっているだけである。上顎右の中切歯と犬歯に回転変位は認められない。破折面は唇側から舌側に向かって深く傾き、下り、また上がる。舌側縁には擦り減ったほぼ平坦な面が確認できる。

今回の上顎右側切歯の破折は、隣接歯に回転変異が認められないことや破折面の形状から、若年期の歯冠破折とは考え難く、壮年から熟年期の歯冠破折と推測される。一応、熟年期までを想定するが、死の直前のものではない。

風習的抜歯を疑う場合には、先天性欠如、埋伏、外傷や病的脱落との鑑別が必要である(大多和, 1983)。本歯の場合、う蝕による歯冠の崩壊と外傷との鑑別が大事になってくるが、う蝕による歯冠崩壊の形状は示していない。転倒による、本歯の歯冠破折の可能性も考えられないわけではない。しかし、古墳時代の風習的抜歯で対象となった歯種で多いのは上顎第1小臼歯と上顎側切歯であり、片側のみ抜歯が多く、抜歯回数は1回、施行年齢はほぼ壮年期(成年期)と推定されている(土肥・田中, 1988)。

現代の歯科治療においても、歯根の屈曲や湾曲、多根歯、根尖細長、歯根分岐開大などの場合、抜歯は非常に難しく、歯冠破折や歯根残存、歯槽骨の骨折などの事故が起こる(石川, 1979)。また、縄文時代や古墳時代の抜歯の際に破折し、顎骨中に残った歯根が確認されている(島・鈴木, 1968; Pietrusewsky and Douglas, 1993; Takenaka et al., 2001; 竹中ほか, 2002; 竹中ほか, 2005)。これらのことを考え合わせると、飯隈地下式横穴墓群22号墓人骨の上顎右側切歯は意図的抜歯が施され、歯冠が破折したために、歯根が折れ残った可能性を第一に考えるべきであろう。

先史時代の抜歯の方法には、歯を強打して打ち欠く方法、糸や紐で歯を牽引したり、挟んでゆすって抜く方法があったと考えられている。抜歯の際、どのような方法を取ろうとも、歯根を歯槽から完全に脱臼させることができれば、

歯根が破折することはない。糸や紐で歯を牽引して抜く方法、挟んでゆすする方法では、歯を強打して打ち欠く方法に比べ、歯にかかる力は小さく、歯根破折など抜歯の失敗が起きる可能性は少ないが、抜歯終了までかなり時間がかかり、痛みを感じる時間も長くなる。歯を強打して打ち欠く方法は、施術時間が短いため、抜歯時に感じる痛みも一瞬であるが、施術時に強大な力が歯の頬側から舌側にかかる。従って、他の方法に比べ、歯根破折や歯冠破折、歯槽骨骨折など抜歯操作の失敗も起こりやすい。

抜歯しようとする歯の前面に木片をあてて、これを石でたたいて抜歯したと言われる近世のハワイ諸島人には、抜歯頭蓋100例中約半数の歯槽部に抜歯失敗による破損歯根がみられるという(島・鈴木, 1968)。抜歯の施された縄文人骨中の破折残存歯根の割合は、Takenakaら(2001)によれば9.4%(53体中5体)と、ハワイ諸島人に比べ少ない。しかし、抜歯失敗が全くないというわけではなく、縄文人にも10%近くに抜歯失敗の痕跡が認められているということから、Takenakaら(2001)はやはり縄文人も抜歯操作のある段階で石などを使い打撃により歯を脱臼させる手法を用いていた可能性を考えている。本例の場合も本州縄文時代人同様、石などを使い打撃により歯を脱臼させる抜歯手法を用いて抜歯が行われた可能性が高い。

地下式横穴分布域における抜歯風習

地下式横穴墓は現在の宮崎県南部から鹿児島県大隅半島にかけての地域に分布する。この墓制は、在地の人々が営んだ墓制と考えられている。地下式横穴墓の分布域の中でも南九州山間部の地下式横穴墓は調査例が多く、多数の保存良好な人骨が出土している。それに比べると、宮崎平野部や大隅半島では調査例が少なく、人骨の出土数も少ない。

古墳時代の南九州を特徴づける墓制である地下式横穴墓から出土した抜歯人骨の数は、南九州山間部のえびの・小林盆地から出土した人骨に3例、山間部と宮崎平野部の中間に位置する都城盆地から出土した例が1例、宮崎平野部から出土した例が1例、そして本例を加え、大隅半島から出土した人骨が3例の8例となる(表1)。

多数の人骨が出土している南九州山間部のえびの・小林盆地に比べ、宮崎平野部や大隅半島は出土人骨数の割に抜歯人骨の割合が高い。えびの・小林盆地での抜歯人骨の割合は、ほぼ0%に近い値となる。土肥・田中(1988)によれば、古墳時代の抜歯は上顎第1小臼歯または上顎側切歯の片側性抜歯が多く、抜歯回数は1回、施行年齢はほぼ成年期と推定されている。えびの・小林盆地から出土した人

骨の抜歯対象歯は下顎側切歯や下顎第2小臼歯であり、古墳時代の抜歯に多い抜歯部位ではない。これらのことから考えると、南九州山間部のえびの・小林盆地での古墳時代の抜歯風習が存在したとは言えない(竹中ら, 2005)。しかし、地下式横穴墓分布域の中でも、宮崎平野部、都城盆地や大隅半島には今回の飯隈の事例が加わったこともあり、抜歯風習が存在した可能性が考えられる。

風習的抜歯は、縄文時代後晩期の日本列島本土で、成人、結婚、服喪など人生儀礼として、盛んに行われ、上顎左右の犬歯と下顎の前歯がよく抜歯された。古墳時代の抜歯風習は、縄文時代や弥生時代の風習的抜歯とは抜歯の意義や抜歯の部位が異なる(土肥・田中, 1988)。地下式横穴墓分布域の宮崎平野部、都城盆地や大隅半島の抜歯例をみても、縄文・弥生期とは異なり、古墳時代の新たな風習的抜歯の部位と同じである。

地下式横穴墓も、副葬品や埋葬様式、埋葬儀礼などから考えると、古墳文化の影響を受けている。地下式横穴墓分布域の中でも、宮崎平野部、都城盆地や大隅半島は前方後円墳や多数の高塚墳が存在する。前方後円墳と地下式横穴墓群との関係は、宮崎平野や大隅半島の平野部から山間部に向かうにつれ疎遠になっていく(北郷, 1986)。前方後円墳は、えびの・小林盆地には認められない。このような脈絡から考えると、新たな意味の抜歯風習が古墳時代の宮崎平野部、都城盆地や大隅半島に伝播して来て、これらの地域の地下式横穴墓を営んだ中小豪族の人々が風習的抜歯を行っていたとしても不思議ではない。

4. 引用文献

- 土肥直美・田中良之(1988)古墳時代の抜歯風習. 日本民族・文化の生成1, 六興出版, 東京, 197-215.
- 北郷泰道(1986)南境の民の墓制. えとのす31: 108-122.
- 池田次郎・茂原信生(1975)青島貝塚の縄文人骨について. 宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告, 宮城県南方町, 155-187.
- 石川武憲(1979)いわゆる難抜歯. 歯界展望 別冊, 抜歯の臨床, 医歯薬出版, 255-263. 松本彦七郎(1929)陸前国桃生郡小野村川下り響介塚調査報告. 東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告7: 1-65.
- 松下孝幸(1984)宮崎県野尻町大萩地下式横穴出土の古墳時代人骨. 宮崎県文化財調査報告書27: 53-111.
- 松下孝幸・野田耕一(1983)宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨. 宮崎県文化財調査報告書26: 78-107.
- 宮崎県(1993)宮崎県史 資料編 考古2. 宮崎県.
- 大多和利明(1983)広田弥生人の所謂風習的抜歯, 特にその抜歯痕の検討. 九州歯科学会雑誌, 37: 588-600.
- Pietruszewsky, M. and Douglas M. T. (1993) Tooth ablation in old Hawai'i. *J. Polynesian. Soc.*102, 255-272.
- 島五郎・鈴木誠(1968)ハワイ諸島人の抜歯について. 日本民族と南方文化, 平凡社, 東京, 41-60.
- Takenaka, M., Mine, K., Tsuchimochi, K. and Shimada, K. (2001) Tooth removal during ritual tooth ablation in the Jomon period. *Bulletin of Indo-Pacific Prehistory Association* 21, 49-52.
- 竹中正巳・緒方重光・我那覇生純(2002)縄文時代における風習的抜歯操作失敗の追加例. 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 12(2): 31-34
- 竹中正巳・小片丘彦・峰和治・佐熊正史(1993)風習的抜歯の疑われる古墳時代若年女性人骨. 人類学雑誌101: 483-489.
- 竹中正巳・高橋由香・東憲章・北郷泰道(2005)風習的抜歯の疑われる地下式横穴墓出土人骨の追加例-宮崎県都市下川東牧ノ原地下式横穴墓群16号墓出土人骨. 宮崎県立西都原考古博物館研究紀要1:24-29.

(平成29年12月15日 受理)

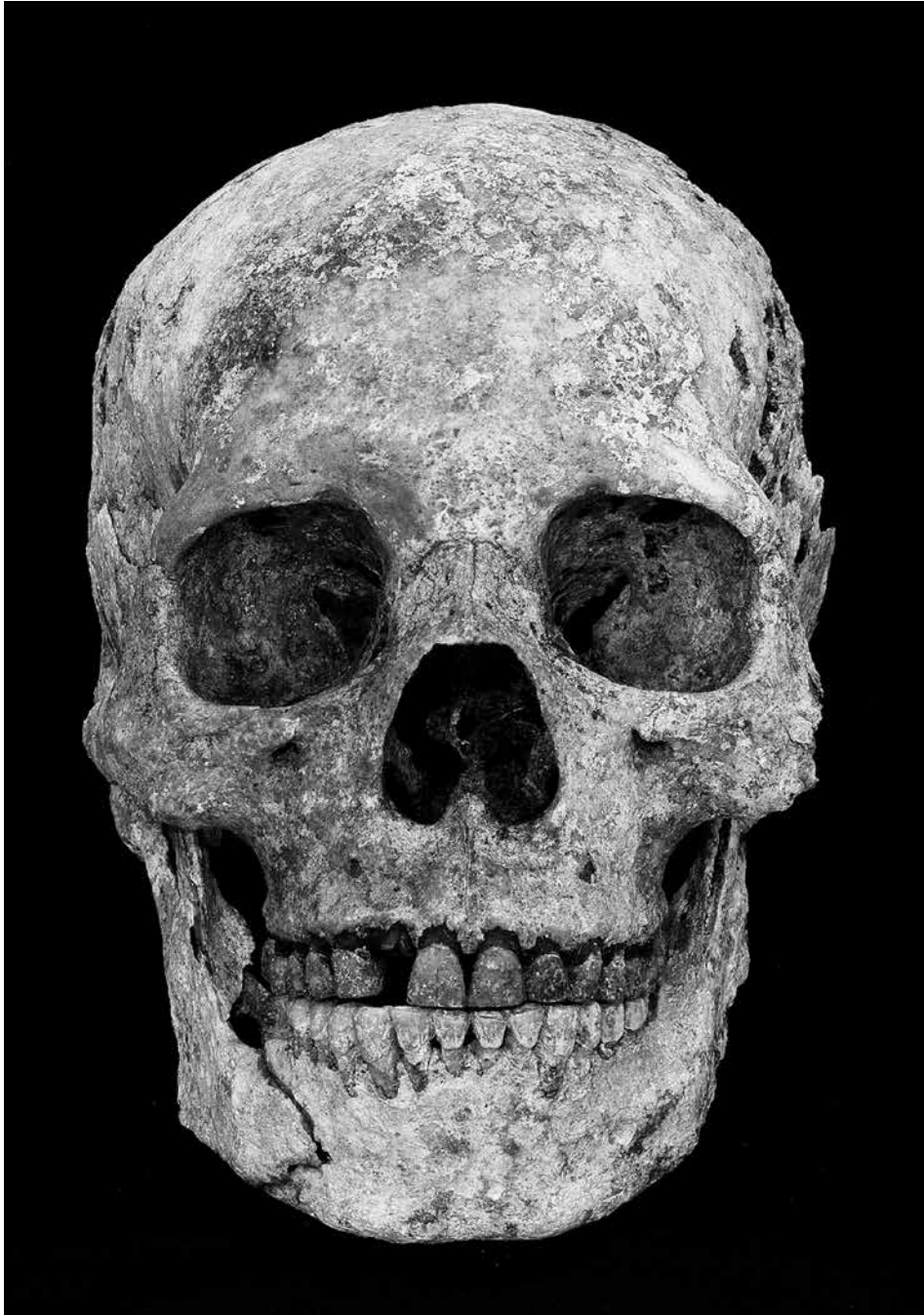


図1 飯隈地下式横穴墓群22号墓人骨 (男性・熟年) (頭蓋正面観)

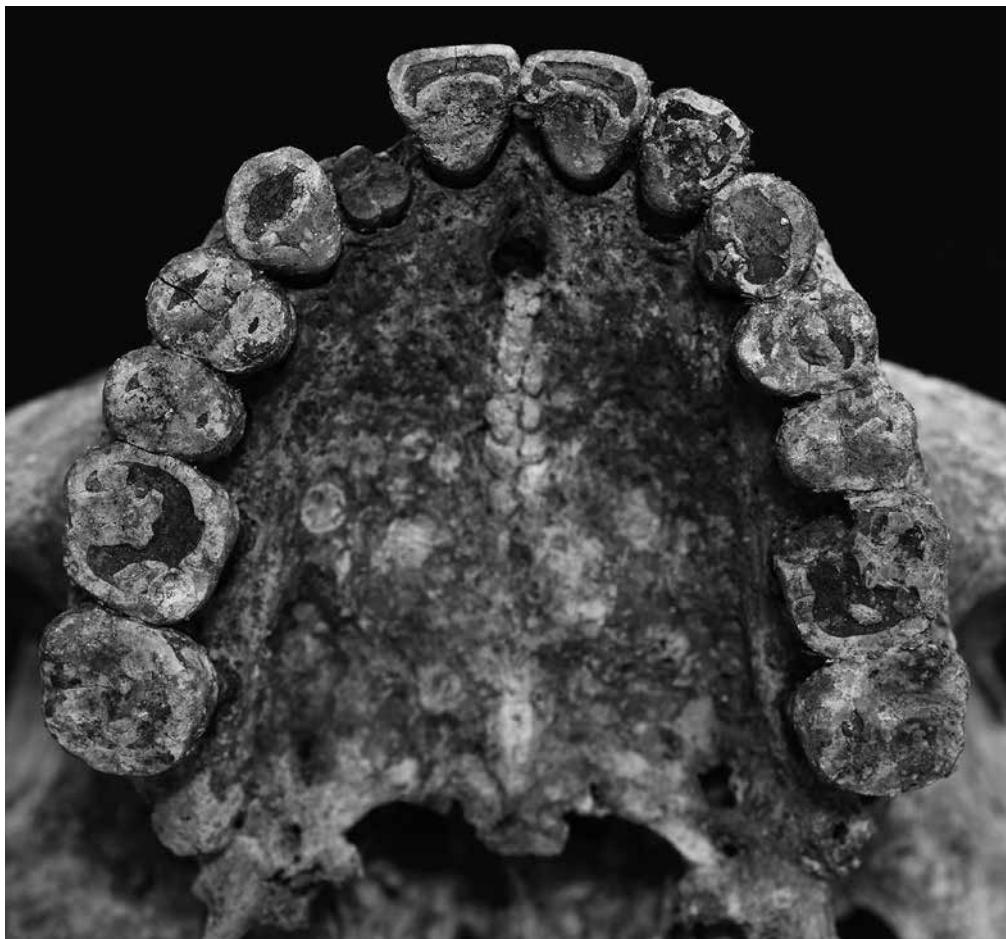


図2 飯隈地下式横穴墓群22号墓人骨（男性・熟年）（上顎咬合面観）



図3 飯隈地下式横穴墓群22号墓人骨の上顎右側切歯（唇側面近心隅角から撮影）



図4 飯隈地下式横穴墓群22号墓人骨の上顎右側切歯（咬合面から撮影）



図5 飯隈地下式横穴墓群22号墓人骨の上顎右側切歯（舌側側から撮影）